横浜陶芸友の会だより

第１５２号
平成２４年
１０月１日発行

『第34回　作品展』のお知らせ

事業部

今年度の『作品展』の日程を、再度お知らせいたします。**申し込みと作品展の詳細**については、**12月初旬**に会員の皆様に**送付**いたします。

出展料は、友の会への賛助会費です。区画はギリギリではなく、ゆとりのあるスペースで申し込みましょう。

そして、この会場での**『最後の作品展』**を盛り上げるためにも、会員皆様方の一人でも多く、一点でも結構ですので、上手、下手ではなく、陶芸を愛好する者として参加していただきたいと思います。

是非、多くの個性的な作品で会場を埋めつくし、盛り上げてまいりましょう。

【会期】　平成25年1月10日(木)～15日(火)

【会場】　横浜市民ギャラリー　1階展示場
（教育文化センター内　ＪＲ関内駅下車）

【特設コーナー】「どんぶり」25㎝以下
※出展料は無料
・魅力的な楽しい「どんぶり」が出てくることを期待しています。

役員会だより

８月最後の土曜日、アツーイ昼下がり、当初の予定通りに日が取れず、曜日変更があったために少人数での開催となり、黄瀬戸講習会・秋の焼成会・窯場見学会・作品展等々行事を控えている状態で特に新しい報告はありませんでした。

只、来年度の開催地候補に心辺りのある方の情報がほしいとの事で是非、御連絡いただきたいと事業部からでした。

会員の皆様の情報など積極的なかかわり方をいつもいつも期待しております。

文責　小松

次回役員会予定は11月17日です。

黄瀬戸・秋季焼成会風景
2012/　8月9月

専修部

受付会計忙しそう

『おじゃまします』【作業場拝見】 その②

焼成窯を持ち、日夜作陶に勤しんでいる会員の方をお訪ねし、その作業場や作品作りへの思いなどを、皆様にご紹介していく第二回目は「友の会」の会計を担当していただいている石井さんです。

石井誠一さんと愛猫

【石井誠一さんとの談話】

①陶芸をはじめるきっかけは？

・43才からお茶を始めた。骨董市でお茶道具を見ていたら、店主に『茶道具はマルが一個ちがうよ』と言われ、「自分で作って茶会を開きたい」と思い、陶芸をはじめた。先生から『自分が作りたいと思うものを作れ』と言われ、茶陶にこだわり今日に至っている。

七、八年前に自分の作った茶道具で、お茶会を開くことができた。

②長く続けられたのは？

・「これを作るんだ」という目的（こだわり）をもって作るのが一番かな。

③陶房はいつ、どの様なきっかけで？

・教室をやめ、独学でやるようになってから、35 cm × 45 cm の棚板が入る焼成窯を入れた。現在は二代目で 30 cm × 30 cm の棚板が入る窯を使用している。

④作陶はいつおこなっていますか？

・時間がある時にやっている。

⑤個展などの活動は？

・自宅で月2回、陶芸教室を自治会役員仲間と行っていて、年一回、連合自治会主催の「アート展」に出展している。

この仲間と一緒に四年前から「地域での仲間作りと人生のセカンドステージを充実させる」目的で、地域ケアプラザとの連携で各界の著名人の話を聞く講座や、男の料理教室、陶芸などのイベントを、年6～7回行っている。退職してから家に閉じこもりがちになる男性のセカンドライフを充実させ、生涯学習の機会を提供することを通じて地域の仲間と触れ合う機会を増やせるように活動している。

⑥「第33回作品展」の作品は今までと作風が変わりましたが、作品作りへの思いやこだわりは？

・多分、東日本大震災の影響があり、震災の一ヶ月後に南アフリカを旅行し、ビクトリアの滝の轟々と水が流れ落ち舞い上がる様を見た時、震災の映像の、人の命が水の力で藻屑と消える様と重なり、水の恐さ、追悼の意識が芽生えたのかもしれない。自分の中で理解できない自分の動きがあり、それが作品の滝となった。また、追悼の表現として昇天する「鶴」となった。自分が意図した物では無いので持続してできるかは分からない。

陶芸窯（上）と 作品（下）

○石井さんの陶房は、鎌倉街道の原交差点から小山台方面に入り日野南小の近くにある住宅地の一角です。

陶房はリビングを増築し5～6人が手びねりできる広さがあり、現在は月二回の教室に男性が五人来ています。

お話の中の、地域に根ざしたセカンドライフの仲間作り活動は、高齢者の多い「友の会」においても大事な事だと感銘を受けました。

今後も益々のご活躍を祈念しています。

（文責）事業部　鍋島弘義

黄瀬戸作陶会報告

専修部

黄瀬戸作陶会は厳しい残暑の続く中、8月21日（火）に横浜市技能文化会館の602号室を朝9時より午後5時まで一日借り切って行いました。参加者は友の会会員6名と専修部員6名の合計12名で。定刻の9時には全員集合しましたので、直ちに作陶に取り掛かりました。

黄瀬戸作陶に適する粘土として美濃の「もぐさ土」を40㎏取り寄せましたので、一人3㎏ずつ渡し、余分に欲しいと言う人もあり全部さばけてしまいました。

電動ロクロ3台と手ロクロ、石膏型、木型を用いてのタタラでの型起しと、各々作陶を始めましたが、もぐさ土は ぱさぱさとした感じですぐひび割れするなど、皆さん作陶には苦労していたようでした。

電動ロクロで鉢や丼等作った作品も気温が高かったのが幸いしたのか、午後5時前迄に高台の削りまで終えることができました。

詳しい作陶点数は分かりませんが相当の数が出来ましたので、秋季焼成会では技能文化会館の窯も久し振りに満杯です。

専修部では来年も何か企画を立てて活動しますので、皆様の多数の参加をお待ちしております。

黄瀬戸作陶会風景

秋季焼成会報告

秋季焼成会は

9月2日（日）焼成作品受付
9月20日（木）素焼窯入れ
9月21日（金）素焼窯出し
9月23日（日）釉薬掛け
9月26日（水）本焼窯入れ
9月27日（木）窯の上蓋開け
9月28日（金）本焼窯出し
9月30日（日）作品引渡しと
作陶懇談会

と8日間に渡り延べ31名の部員により活動してまいりました。

窯が満杯になりました

作品受付日には、直前に行った黄瀬戸作陶会で作った作品が多数あった為、91個の作品を受け付けました。素焼日と釉薬掛け日にも作品を持ち込む人もあり、14名の参加者と154個の作品点数となり、技能文化会館の窯も満杯になりました。

9月30日の作品引き渡し日には各々おつまみと飲み物を持参、焼き上がった作品におつまみを盛り、恒例の作品作陶談議に入りました。各自、自分の作品を前に参加者一人ずつが、作陶のねらい、出来映え、反省点等話しました。

今回は黄瀬戸焼成に大いに期待した人が多かったようですが、釉薬掛けが少しうすかったのか焦げた部分が多かった作品が多数見受けられました。

懇談会は大いに盛り上がり、もう一度黄瀬戸にチャレンジ、リベンジして見るという声も多く、来年への課題ということにして、定刻の昼に解散となりました。

陶陶さん

猛暑は乗り切れましたか？

第７４号

あかほし

お月見会風景

焼成会後に開催された『お月見会』での声を拾いました。

先ず鈴木和子さんの「これが友の会の本領だね！」の声に始まりカンパイ！今窯から出てきたばかりの手作りの器に、手作りの料理を盛り付けて、陶芸談義が始まりました

八田さん　黄瀬戸が好きで飛び入りで見に来ました。いつもここは　いいね～いい器が作れて、みんなに会えて、美味しいものが食べられるし、幸せで～～～～す。

島本さん　器を前に『これは十人十色だね。』

池見さん　いつも出来ない私には、皆さんに助けていただいて、またひとつ作品が増えました。嬉し～い！

井上さん　黄瀬戸について今までは、自分の物なので気楽に作っていたが、みなさんにということで、僕のはガス窯、ここのは電気窯、土の違いもあり、出来具合もいろいろ違うということ勉強になりました。同じ条件ではないということです。

中村さん　いつも器や皿が出来ると『こんなのに入れるとおいしそう』とか思っていて、今日は本物の料理がのっていて本当にいい！

山口さん　今回は、秋刀魚用の長い皿が出来て嬉しいです。

『お月見会』とは名ばかりの青空の下でしたが、皆様、持ち寄った料理と飲み物に、おなかも心も満たされて帰宅の徒につきました。

前号の**「もったいないコーナー」**でお伝えした寺尾さんの電気釜は嫁入り先が決まりました。ご協力有難うございました。　広報部

編集後記

何時までも変りはないは有り得ない。灯油窯の燃料ホースは劣化するし、カンタル線は突然切れる、指先は震えるし、腰も痛い。でも今年の課題「どんぶり鉢」まだ捻れる。創作意欲はまだなんとか変りません。

吉良　謙

ホームページもチェック!!

横浜陶芸友の会

検索

http://www20.atpages.jp/tomonokai/

横浜陶芸友の会だより
第１５２号

（平成 24 年 10 月 1 日発行）
発行人 横浜陶芸友の会
会長　松崎 紀一

編集責任者 広報部長 吉良謙